

星野命教授のご退職に際して

中野 照海

今年度末をもって、星野命教授は、北陸学院短期大学長にご就任のため、やむなく本学を退職されることになりました。このことは、教育研究所、教養学部教育学科、および大学院教育学研究科における、研究と教育の推進にとっては多大の痛手であります。しかし、新しいお仕事に就任される星野教授の長年にわたるご貢献に対して、感謝と今後のおつきあいを願って、ご経歴の一端をここに記録するものであります。

星野命（ほしのあきら）教授は、1927年8月24日に石川県金沢市で生まれ、旧制東京都立高等学校（理科乙類）を経て、東京大学文学部心理学科を1952年に卒業されました。その後直ちに、名古屋大学医学部精神医学教室に入局され、3年間の研修を終了の後、フルブライト交換留学生として、米国アイオワ州立大学大学院で、臨床心理学及び文化とパーソナリティの研究を続けられました。この当時の研究が、臨床心理学の分野に留まらないで、人格心理学、社会心理学、さらに文化人類学など、現在の幅広い分野への発展の機縁になったものと思われまます。アイオワ州立大学での研究の後、名古屋大学医学部村松常雄教授の指導による「日本人の文化とパーソナリティ」の研究調査の延長として、1956年に米国ミシガン大学の心理学クリニックに移り、ジョージ・デボス教授の助手として、日本人研究の調査資料の分析に従事されました。

米国での2カ年間の研究を終えて、1957年に国際基督教大学教養学部専任講師として社会科学科（教育学科の分離以前）に迎えられて、心理学を担当

されることとなり、現在に至っております。1960年教養学部教育学科助教授、1966年同学科準教授、1972年同学科教授と昇任されました。同時に、大学院教育学研究科教育心理学専修課程の学科目も担当されました。この間に、本学学生部（学生活動担当）行政補佐員、アテネオ・デ・マニラ大学日本研究プログラム主任、大学院副部長、学生部長、教育学科長、教養学部長、教育研究所長に就任するなど、本学での行政的任務に当たられました。

本学での研究と教育に専念されるとともに、東京大学教養学部、東京大学社会学研究科、聖心女子大学、北陸学院短期大学、東京神学大学などで、非常勤講師として学科目を担当されました。さらに、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所、国立民族学博物館、ハワイ東西センター・文化学習研究所などでも、研究員として研究活動を進められました。学会活動においても、所属される学会での重要な役割を果たされてきました。現在も、日本心理学会評議員、日本心理学会『心理学研究』及び『Psychological Research』英文校閲委員、日本社会心理学会常任理事（学会活動担当）、異文化間教育学会理事、日本心理臨床学会理事、日本人間性心理学会運営委員を務められています。

星野教授は、多方面に渡る研究を進められ、多数の著作を発表されております。研究の御関心は、大別すると、①臨床心理学・カウンセリングの研究、②人格形成の研究、③異文化・多文化の中の人間形成、④帰国子女の適応の問題など、多岐に渡っておられます。これらの研究の特徴として、心理学と文化人類学を基礎とした学際的な研究方法を挙げることができます。このような研究の特徴の一端は、学術調査『奄美』（九学会連合共同調査における日本心理学会分担調査1976年）、『日本の風土』（同上、1981－83年）、『米国における民族諸集団とその価値体系に関する文化人類学的研究：イタリア系アメリカ人の文化遺産とコミュニティ形成』（文部省海外研究助成1976年）、『文化摩擦』（文部省科学研究助成特定研究1978年）などへの参加に見ることができます。

本学における多忙な行政的責任を負われながらも、教育活動に熱心に当た

られたばかりでなく、宗教活動にも、学生生活一般の指導にも尽力されました。学生寮のアドバイザーや、多年に及ぶ学生カウンセリング・センターでの学生相談に努められました。ICU教会においては、役員会委員(1967年－1969年)として、またパイプオルガンの設置に当たっては、その募金委員会委員長(1968年－1971年)として奉仕されました。さらに、1985年以来「東京多摩いのちの電話」の運営委員と研修委員として、地域への奉仕を続けておられます。

この度、ご退職にあたり、本学名誉教授の称号を受けられます。これは、33年に及ぶ年月にわたる本学へのご功績と、関連する学会および社会へのご功績から顕彰されるものです。ご退職に際して、末尾に略歴を付して、教育研究所、教育学科、教育学研究科の一同とともに、今後のご健勝を願い、ここに感謝の詞を記します。有難うございました。

星野 命 教授 略歴・業績

生年月日：1927年（昭和2年）8月24日（石川県）

【学 歴】

- | | |
|-----------------------------|---------------|
| 1. 東京都立高等学校（旧制）理科乙類 | 1948年3月 卒 業 |
| 2. 東京大学 文学部（心理学） | 1952年3月 文 学 士 |
| 3. 名古屋大学 医学部（臨床心理学） | 1954年3月 研修終了 |
| 4. アイオワ州立大学大学院（臨床心理学・社会心理学） | 1956年3月 研究終了 |

【職 歴】

1. 名古屋大学 医学部（臨床心理学）
1954年4月－1955年6月 研 究 員
2. ミシガン大学 心理学クリニック
1956年9月－1957年6月 研究助手
3. 国際基督教大学教養学部社会科学科（心理学）
1957年9月 専任講師
4. 同大学教養学部教育学科（心理学）
1960年4月 助 教 授
5. 同大学学生部（学生活動室）
1962年5月－1966年9月 行政補佐員
6. 同大学教養学部教育学科（心理学）
1966年4月 準 教 授
7. 同大学学生カウンセリング・センター
1966年10月－1972年3月 カウンセラー
8. アテネオ・デ・マニラ大学日本研究プログラム
1971年11月－1972年6月 主 任
9. 国際基督教大学教養学部教育学科（心理学）
1972年4月－現 在 教 授
10. 同大学学生カウンセリング・センター
1972年4月－1978年3月 カウンセラー
11. 同大学大学院 1974年4月－1976年3月 大学院副部長
12. 同大学学生部 1978年4月－1980年3月 学生部長
13. 同大学教養学部教育学科
1982年4月－1983年9月 教育学科長
14. 同大学教養学部 1985年4月－1987年3月 教養学部長
15. 同大学教養学部教育学科
1988年4月－現 在 教育学科長
16. 同大学教育研究所
1988年4月－現 在 研究所長
17. 同大学日本語教育研究センター準備室
1989年6月－現 在 準備室長

この間、東京大学教養学部、東京大学社会学研究科、聖心女子大学、北陸学院短期大学、東京神学大学などで非常勤講師として学科目を担当。さらに、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所、国立民族学博物館、ハワイ東西センター・文化学習研究所などで、研究員を務める。

【学会／研究会等】（現在継続中のもののみ）

1. 日本心理学会 評議員 1982年－
2. 日本心理学会『心理学研究』及び『Psychological Research』編集・英文校閲委員 1976年－
3. 日本社会心理学会 常任理事（学会活動担当） 1985年－
4. 異文化間教育学会 理事 1980年－
5. 日本心理臨床学会 監事 1981年－1988年
理事 1989年－
6. 日本人間性心理学会 運営委員 1983年－
7. 「東京多摩いのちの電話」 運営委員，研修委員 1985年－
8. 「文化と人間の会」 代表 1978年－1989年

【主要な業績】

A 研究論文

1. 「都市化に伴う社会構造ならびに住民の社会態度の変容：埼玉県入間郡武蔵藤沢の場合」『社会科学ジャーナル』第7号，1968, pp. 342-349.
2. “National Findings : Japanese Data” Hess, R. et als.(eds.) Final Report : Authority, Rules, and Aggression—A Cross-national Study of the Socialization of Children into into Compliance System Part I, Chapt. 5, University of Chicago, 1969, pp. 1-76.

3. 「あくたいもくたい考：悪態の諸相と機能」『季刊人類学』2巻3号, 1971, pp. 29-52.
4. "An Attempt to Analyze Japanese Invective Lexemes by Mean of Semantic Differential" JSPS Bulletin (Report of Japan-US Joint Research Project on Cross-Cultural Equivalence of Language), International House, 1973.
5. 「教育と人格理論」『教育学研究』第42巻2号, 1975, pp. 39-51.
6. "Current major trends in psychology in Japan," *Psychologia*, 22(1), 1979, pp. 317-386.
7. イタリア系アメリカ人のコミュニティ形成と民族文化——シカゴ西部のコミュニティの場合」綾部恒雄編『アメリカの民族集団』日本放送出版協会, 1978, pp. 317-386.
8. "The ethnic heritage of the Italian-Americans in the United States and their community life" T. Ayabe (ed.), *Ethnicity and Cultural Pluralism in the U.S.*, The Research Institute of Comparative Education and Culture, 1978, pp. 191-250.
9. 「アメリカのイタリア人」『季刊：民族学』1977, 1, pp. 80-90.
10. 「帰国学生の在外体験に見る生活適応とアイデンティティをめぐって」小林哲也編『教育における文化的同化と多様性』1980, I, pp. 116-125.
11. 「現代悪口論——けんかことばの諸相と原理」『言語生活』1978, 321, pp. 18-32.
12. 「コミュニティ心理学：その歩みと課題」『社会精神医学』1980(3), pp. 185-193.
13. 「幼少期の原風景としての風土」『文部省科学研究費報告書：日本の風土に関する総合研究』（長谷川浩一との共著）, 1983, pp. 28-38.
14. 「展望：異文化間教育心理学研究」『教育心理学年報』（渡辺文夫との共著）, 1984, 24, pp. 137-150.

15. 「国際基督教大学における留学生」『教育と医学』, 1984, 32(9), pp. 75-81.
16. 「ライフサイクルと危機新論」日本家族心理学会編『ライフサイクルと家族の危機』シンポジウム, 金子書房, 1986, pp. 53-56.
17. 「二十答法」詫摩監修『パッケージ：性格心理第4巻性格の理解と把握』
18. 「民族的帰属意識—エスニック・アイデンティティの任意性」『文化人類学』第1巻, 第2号, 1985, pp. 34-45.
19. 「文化とストレス対処行動—心理学の立場から—」『ストレスと人間科学』第1巻, 広英社, 1988, pp. 171-174.
20. 「国際化社会と発達課題」小林, 江原編『国際化社会の教育課題』行路社, 1987, pp. 63-79.
21. 「帰国子女の適応(自文化復帰)」『Health Science』第3巻, 第1号, 1987, pp. 30-34.
22. 「青年期における異文化体験の自尊感情と自我同一性に及ぼす影響」(文部省科学研究費助成金(一般研究C)報告書—長井進との共著) 1988, pp. 1-39.

以上の他, 多数の研究論文あり。

B 単行本(編著と分担執筆を含む)

1. 「人間の成長」石田, 泉, 宮城監修『現代文化人類学第5巻 人間の行動』第2章, 中山書店, 1960, pp. 51-110.
2. 「宗教的情操の教育」牛島, 白井他編『講座家庭と学校第3巻 情操の教育』第4章, 金子書房, 1965, pp. 165-225.
3. 「人格の社会・文化的背景」佐治, 水島, 星野編『臨床心理学講座第1巻 臨床心理学の基礎』第3章, 誠信書房, 1968, pp. 77-120.
4. 「社会的人間の形成と社会化」本明編『人間—その変革を求めて』芸林書房, 1969, pp. 56-76.
5. (編著)「臨床心理学の現状と課題: パーソナリティの機能—情意的側面: 文化のなかの人間—現実的文化と精神病理」星野, 詫摩編『臨床

- 心理学』序章, 第3章, 第5章, 有斐閣, 1972.
6. (編著)「性格の客観的側面」, 「性格の主體的側面」, 「性格の個人差と変化に対する抵抗」, 「理想的性格のイメージ」, 「現代人の求める理想的性格」, 「心理学者の描く理想像」, 「性格の理想像とその自己実現」, 「治療から個性の伸長へ」, 「体験 — 性格変化の一変数」, 「集団の中での主體的体験学習」, 「性格の再統合と個の脱却」, 詫摩, 星野編『性格は変えられるか』有斐閣, 1972.
 7. 「社会環境の診断」村上編『心理学研究法12 臨床診断』第5章, 東京大学出版会, 1974, pp. 179—209.
 8. (編著)「社会言語という新分野」藤永, 星野編・解説『ことばと心理』(現代のエスプリ 85), 至文堂, 1974, pp. 143—158.
 9. 「人格理論の課題」小口, 辰野編『教育心理学原論』有斐閣, 1975, pp. 143—158.
 10. (編著)「人格の概念」, 「人格の社会的文化的要因」星野, 河合編『心理学4 人格』, 第1章, 第7章, 1975, pp. 99—120.
 11. 「社会化の比較文化論」菊池, 齋藤編『社会化の理論』朝倉書房, 1979, pp. 185—213.
 12. (編著)「異文化における社会心理学の研究方法与一般的問題」, 「人間の社会化・人格成熟の過程と文化」, 星野編『人間と文化 — 人間探求の社会心理学4』朝倉書房, 1979, pp. 134—150, pp. 53—64.
 13. 「集団の過程 — 集団体験学習」安倍, 島田編『現代社会心理学』ブレーン出版, 1978, pp. 65—80.
 14. 「人格心理」沢田, 古畑編『人間科学としての心理学』サイエンス社, 1978, pp. 190—214.
 15. (編集解説)『現代のエスプリ — :カルチャーショック』161号, 1980, pp. 5—30.
 16. (編著)「新しい型の日本人の誕生 — 異文化の中で育つ子供たち」荻野, 星野編『カルチャー・ショックと日本人 — 異文化対応の時代に生きる』有斐閣, 1983, pp. 171—194.

17. 『異文化の心理1——異文化との出会い』（異文化と人間の会：齋藤，菊池と共同編集）川島書店，1983.
18. 「子どもたちの異文化体験とアイデンティティ」小林編『異文化に育つ子どもたち』第2章，有斐閣，1983. pp. 29－61.
19. 「親と子の絆の危機を超えて」河合他編『親と子の絆——学際的アプローチ』創元社，1984. pp. 164－172.
20. 「文化とパーソナリティ」河合他編『性格の科学』（現代の心理学6）小学館，1984. pp. 153－187.
21. 「アジアの心理学」西村他編『人間の心理学』第16章，第1節，八千代出版，1984. pp. 261－274.
22. 「臨床心理学の意義と役割，および臨床心理学の方法論」梅岡他編『行動心理学入門』北樹出版，1984. pp. 151－164.
23. 「人間の欲望にみる動物性と霊性」石井他編『ヒューマンサイエンス5：現代文化のポテンシャル』中山書店，1984. pp. 35－58.
24. 「二十答法」詫摩監修『パッケージ：性格心理第64巻 性格の理解と把握』ブレーン出版，1985. pp. 169－185.
25. 「カルチャー・ショックと性格」詫摩監修『パッケージ：性格心理第4巻 性格の諸側面』ブレーン出版，1985. pp. 120－141.
26. （編著）『社会心理学の交差路（クロスロード）』北樹出版，1986.
27. 「帰国子女教育の研究体制」，「教育施設・研究機関の情報ネットワーク」東京学芸大学海外子女教育センター編『国際化時代の教育——帰国子女の課題と展望』第3章，第3,4,5節，創友社，1986. pp. 204－234.
28. （編著）「ケース研究：個性の形態と展開」星野編『性格心理学新講座6』金子書房，1989. pp. 330－
上記の他，多数の分担著述あり。

C 翻訳書

1. G. W. Allport, *Personality and Social Encounter* , 『人格と社会

との出会い』誠信書房，1972年，（原一雄と共著）「第4部 パーソナリティの評価」を担当

2. 「幻覚をおこす薬」（バーロン，ジャーヴィク，バンネル著）『別冊サイエンス』心理学特集「不安の分析」，日本経済新聞，1973. pp.
3. 『現代の心理学1 — パーソナリティ』南博監修，講談社，1979.
4. G. W. Allport『心理学における人間』（共訳），培風館，1977.

D 学術調査

1. 『奄美』（九学会連合共同調査），日本心理学会分担調査，1976. 『日本の風土』1981—1983. 『日本の沿岸文化』1984—1986.
2. 『パーソナリティの発達に関する比較研究— 反抗期の児童・青年の自我形成に及ぼす母親の影響—』（代表：白井常—1974年，1975年，1976年，国際交流基金，アジア財団，日本学術振興会などによる研究助成）
3. 『米国における民族諸集団とその価値体系に関する文化人類学的研究— 民族性の伝達と文化的多元主義との関連—』（代表：綾部恒雄—文部省海外学術調査研究，「イタリア系アメリカ人の文化遺産とコミュニティ形成」を担当，1976.）

【その他の活動】

1. ICU教会役員会委員長 1967年 — 1979年
2. 同パイプオルガン募金委員会委員長 1968年11月 — 1971年3月